

梅の春

四方にめぐる

扇巴や文車の

ゆるしの色も昨日今日

心ばかりは春霞

引くも

恥かし爪じるし

雪の梅の門ほんのりと

匂ふ朝日は赤間なる

硯のうみの

青畳

もじがせき書かき初に

筆ぐさ生ふる浪間より

若布刈るてふ

春景色

浮いて鷗のーイニウニイ四う

いつか東へ筑波根の

かのもこのもを都鳥

いざ言問はん

恵方さへ

よるづ吉原山谷掘

宝船こぐ

初買に

よい初夢を三ツ布団

弁天さんと添ひぶしの

花の錦のかざり夜具

はたちばかりも積み重ね

蓬来山と祝ふなる

富士を背中に家がための

塩尻ながく居すわれれば

ほんに田舎も真柴焚く

橋場今戸の朝煙り

つゞかまでも賑はふて

太々神楽

門礼者

梅が笠木も三囲りの土手に

さへずる鳥追ひは三筋霞の連れびきや

君に逢ふ夜は

たれ白髭の森越えて

待乳の山と庵崎の

その鐘が測かねことも

楽しい仲ぢやないかいな

面白や

千秋楽は民をなで

万歳楽には命を延ぶ

首尾の松が枝竹町の

渡し守る身も時を得て

目出度くこゝに隅田川

つきせぬ流れ清元と

栄え寿く梅が風

幾代の春や匂ふらん幾代の春や匂ふらん。